

シュタイナー研究の四類型 —— 秘教から顕教へ ——

井 藤 元

1. はじめに —— 問題の所在

近年、シュタイナー学校は世界規模で急増しており、その数は世界 80 カ国で 1,000 校を数え、ヨーロッパを中心として、中近東、アジア、アフリカ、中南米、オーストラリアなど全世界に設立されている¹⁾。こうした動きと相関して、関連図書も数多く出版され、特に幼児教育界においてシュタイナーの教育実践は広く受容されている。もはや流行として片付けることのできぬ影響力を継続的に保ち続けているといえる。それもただ単に普及したというだけではない。現在、シュタイナー学校の卒業生調査が行われているが、その調査結果はシュタイナー教育が、時代の要請に叶う形で一定の成果を生み出し続けていることを示している²⁾。

では、教育学研究において、シュタイナー教育は理論的見地から十全に吟味されてきたのだろうか。教育実践の場で脚光を浴びる一方、その思想は依然、シュタイナー思想（人智学）特有の言説によってアカデミズムから黙殺されている。すなわち、「学校は歓迎され、思想は敬遠されている³⁾」。西平が指摘する通り、アカデミズムはシュタイナー思想を「本気で相手にすることなく、思想史における位置づけすら不十分なままである⁴⁾」。つまり、思想研究は実践の普及に大きく後れをとっている。シュタイナー教育という現象を十全に掴みとるだけの枠組みを用意できていないのである。

周知の通り、人智学的世界観は、秘教的色合いを帯び、容易に接近を許さない。人間を物質体、エーテル体、アストラル体、自我から成る構成体と見なす独特の人間観、転生の観点から描き出されるライフサイクル論、宇宙の生成、発展を説く宇宙進化論等々……。

コリン・ウィルソンは次のように語る。「20 世紀のあらゆる重要な思想家の中で、ルドルフ・シュタイナーはおそらく最も研究しにくい人物であろう。シュタイナーの思想になじんでいない人がその著作を読むと次々に障害に出くわし、意気を阻喪させられる⁵⁾（傍点筆者）」。

そして「最も偏見のない読者でさえもうごりごりだとばかりに彼の本を投げ出してしまふ⁶⁾」。ここには人智学研究の困難さが如実に記されている。

実践の受容と思想の敬遠。実践と思想の「乖離状況」は慢性化しつつあるというのが現状なのである。

さて、先に「思想研究は実践に後れをとっている」と記したが、この記述は誤解を招く恐れがあった。正確には現状において、シュタイナーの（教育）思想研究が量的に不足しているわけではない。むしろ、その量は近年著しく増加し、膨大な文献が積み上げられている。研究の増大にもかかわらず、「乖離状況」の橋渡しが果されないのである。思想研究の蓄積が「乖離状況」の解消に寄与してしない。それどころか、実は先行研究の多くはその慢性化に加担しているときえいえるのだ。この点こそ、シュタイナー研究をめぐる最大の問題と考えられる。

では「乖離状況」を慢性化させている要因とは何か。研究の蓄積が、「乖離状況」の解消へと向かわないのはなぜか。本論文ではその構造的問題を見定める。

問題の所在を確かめるべく、以下、先行研究の類型化を試みる。この作業を通じて、ある種の先行研究が孕む問題性（「乖離状況」慢性化への無意識的加担）を暴き出したい。

2. 先行研究の四類型

シュタイナー教育、もしくはシュタイナーの（教育）思想に関する先行研究は、以下の四カテゴリーに類型化が可能であるように思われる（尚、ここでの目論見は、シュタイナーに関する膨大な先行研究を網羅的に把握することではない。先行研究をその傾向性ごとに大別することで、シュタイナー研究をめぐる現状を概観することに主眼を置く）。

予め見通しを立てておくならば、これまでの先行研究は、大きく「閉鎖型」と「開放型」に分類可能である。第一、第二類型は「閉鎖型」に、第三、第四類型は「開放型」に属する。

第一類型	シュタイナー (教育) 思想の概説もしくは分析 (伝記的解説を含む)。	閉鎖型
第二類型	シュタイナー教育実践の概説もしくは分析。	閉鎖型
第三類型	シュタイナー (教育) 思想の比較研究もしくは思想史的研究。	開放型
第四類型	シュタイナー (教育) 思想を他の理論を援用して読み解く試み。	開放型

2-1. 第一類型-閉鎖型

先行研究で最も多く見られるのが、第一類型並びに第二類型である。

第一類型は、「シュタイナー (教育) 思想の概説・分析 (伝記的解説を含む)」を試みるものである。

第一類型のうち、基本的な型の一つに挙げられるのが伝記的研究である。シュタイナーの思想的遍歴を伝記的視座から辿るものは多い。このうち、リンデンベルク著『シュタイナー伝』は、最も体系的である。上下巻合わせて1,000頁を超えるこの大著は、貴重な写真や資料をもとにシュタイナーの伝記的背景が詳細に記されている⁷⁾。また、カルルグレン著『ルドルフ・シュタイナーと人智学』では、シュタイナーの生涯が簡潔にまとめられている⁸⁾。リンデンベルクの伝記的大著とは対比的に、このテキストは小品ではあるが、シュタイナーの生涯を概観するのに有効である。その他伝記的テキストとしてヘムレーベン⁹⁾、ボック¹⁰⁾、イーストン¹¹⁾らの研究が挙げられる。

また、第一類型のうち、シュタイナーの思想を伝記的背景と共に概説するものも多く見られる。つまり「伝記」編と「思想」編に分けて論じられるタイプのものである。代表的研究としてシュパード¹²⁾、エミヒョーベン¹³⁾、エドマンズ¹⁴⁾、ラヒマン¹⁵⁾、セドン¹⁶⁾、吉田¹⁷⁾の論考が挙げられる。これらの論考は、伝記的背景とそこから生み出された思想を同時に視野に入れることで、シュタイナー思想を両面から浮き彫りにさせるものであり、これもまたシュタイナー研究のオーソドックスな型の一つに数えられる。

さらに、第一類型の第三のものとして、シュタイナー (教育) 思想の分析に専心する研究が挙げられる。例えばクグラーは、人智学における認識論、芸術論、社会有機体論をシュタイナーの生きた当時の社会的背景を視野に入れつつ詳細に分析している¹⁸⁾。その他、ウィルキンソン¹⁹⁾、マルティン²⁰⁾、マクダーモット²¹⁾、セドン²²⁾、ウェルバーン²³⁾などがシュタイナーの文献に即して、その思想を概説・分析している。

また、我が国では、シュタイナー関連の翻訳を多数出版している高橋 (巖)²⁴⁾ や西川²⁵⁾ が、数多くの重要な人智学研究を遂行しており、日本におけるシュタイナー思想の普及に多大な貢献をしている。教育理論の研究書としては広瀬の『シュタイナーの人間観と教育方法』が体系的である²⁶⁾。幼児期及び青年期の教育方法を、その背景にある人智学的人間観の分析を通じて明らかにしている。

第一類型に数え挙げられるもののうち、シュタイナーの哲学的名著『自由の哲学』を取り上げた研究もいくつか見られる。世紀転換期以前、思想研究者として活躍していた際に著された『自由の哲学』には、彼の後期思想に見られるような秘教的内容は一切含まれていない。故にその時期のテキストは批判的・理性的吟味が可能である。このため、シュタイナー初期の著作『自由の哲学』の検討を通じて、シュタイナーにおける「自由」の内実を哲学的に描き出そうとする試みがなされている。シュタイナー思想に接近する際の最も手堅いタイプの研究と言えるだろう。だが、あくまで思想研究者時代のテキストという制約があるため、『自由の哲学』分析を通じてシュタイナーの秘教的側面に接近することはできない。確かにそこで論じられている内容は後期思想へと通ずる思想的萌芽を有しているが、『自由の哲学』をもってシュタイナーの「自由」の内実全体を見渡すことはできないのである。この種の研究として、ヴィッツェンマン²⁷⁾、ディーツ²⁸⁾、ゼルク²⁹⁾、パーマー³⁰⁾、スワジャン³¹⁾の研究が挙げられる。

2-2. 第二類型-閉鎖型

次に第二類型について。第二類型は、「シュタイナー教育実践の概説・分析を試みるもの」である。この種の先行研究も膨大に存在する。そのすべてをここで列挙することはできないので、およその傾向性を掴んでおくことにする。第二類型のうち、最も典型的なものとしてシュタイナー教育の特徴を概観する文献 (エ

ブック授業や八年間一貫担任制といったシュタイナー教育に特徴的な教育方法の紹介)が挙げられる。ヴェーア³²⁾、ケリード³³⁾、チャイルズ³⁴⁾、ハーウッド³⁵⁾、ウィルキンソン³⁶⁾、カルルグレン³⁷⁾、クラウダー&ローソン³⁸⁾、リスト&シュナイダー³⁹⁾、ベルン自由教育連盟⁴⁰⁾、高橋(巖)⁴¹⁾などの文献がこれに相当する。

また、幼児教育に特化したものとして、ハイデブラント⁴²⁾、ケーニッヒ⁴³⁾、グルネリウス⁴⁴⁾、ケーティク⁴⁵⁾、ライチェル⁴⁶⁾、堀内⁴⁷⁾などの文献が挙げられる。これに関連して、幼児教育で重要な意味を持つ「メルヘン」や「おもちゃ」を扱ったものに、シュナイダー⁴⁸⁾、ケーニッヒ⁴⁹⁾、ヤフケ⁵⁰⁾、ノイシュツ⁵¹⁾、吉良⁵²⁾らの文献がある。学童期から思春期までの教育を扱った文献としては、コェプケ⁵³⁾、ステイラー⁵⁴⁾、エラー⁵⁵⁾などの研究を挙げておく。

さらに、クッツリ⁵⁶⁾、ニーダーホイザー⁵⁷⁾、クラーニッヒ⁵⁸⁾、高橋(巖)⁵⁹⁾、高橋(弘)⁶⁰⁾、秦⁶¹⁾らは、「フォルメン線描」、「オイリュトミー」などシュタイナー教育独自の実践を分析している。また、絵画教育・美術教育を扱ったものに、コッホ&ヴァーグナー⁶²⁾、ユーネマン&ヴァイトマン⁶³⁾、シュトラウス⁶⁴⁾の文献が、音楽教育を取り上げたものにムーヘ⁶⁵⁾、ヴェンシュ⁶⁶⁾の研究がある。その他、ウリーン⁶⁷⁾、シュベルト⁶⁸⁾はシュタイナー学校の算数・数学教育を概説しており、高橋(巖)⁶⁹⁾、ヴァイス⁷⁰⁾は、シュタイナー教育における治療教育について論じている。シュタイナー学校の教員養成については河津⁷¹⁾の文献に詳しい。

ここでその一つ一つを詳細に検討することはできないが、以上概観した通り、第一類型同様、第二類型の文献も膨大であり、その数は増加の一途を辿っている。

2-3. 第一、第二類型の掃趣

さて、第一、第二類型を概観した上で、シュタイナー教育をめぐる現況(「実践と思想の乖離状況」)は、より厳密に以下のように診断されねばならない。

現状において、第一、第二類型の研究はむしろ十分すぎるほどに積み上げられている。その量は今後も増大し続けるだろう。だが、それらの文献がいくら積み上げられても、現に「乖離状況」の解消に寄与していない。その理由は、第一、第二類型が次のような帰結に至っているように思われるからである。

両類型は、シュタイナー思想(人智学)の肯定的受容を出発点としている。すなわち、基本姿勢としてシュタイナー思想の批判的吟味という視点が欠けている。

これは故なきことではない。人智学は我々の常識的枠組みでもって、到底理解不可能な思想内容を多分に含み持っている。「人類は地球と共に七段階に進化する(宇宙進化論)」などといった人智学の思想について、我々は議論の余地をもたない。それは「正しいか否か」ではなく、「信ずるか否か」の問題である。この点についてヴェーアは次のように述べる。「シュタイナーの発言は、それが霊的探究の結果であると主張される限り、理解の上で多くの人々にとって著しい障害となっている。その発言の衣装をなしてあり、時折、激しい批判の対象となる言語形態(とりわけ講演の文章の場合)は別として、用意のない読者は、発言された事柄を前にして途方に暮れてしまうのである。人智学の一次文献を理解するには、自然科学、哲学、それに心理学などの適正な教養があっても、それだけでは十分とは言えない。明らかに、特殊な解釈学的補助手段が必要なのである⁷²⁾。人智学の理性的吟味はウィルソンが指摘していた通り(「最も偏見のない読者でさえもうこりこりだとばかりに彼の本を投げ出してしまう」)、人智学の思想的性質故に困難なのである。

従って、第一類型のテキストは、人智学用語に馴染めない者にとっては、そもそも読み進めることすらできないであろう。人智学を解説するのに用いられる用語自体が特異な人智学用語なのである。それ故、テキスト理解のためには、その大前提として人智学への共感的姿勢が求められる。まずもって人智学用語(「エーテル体」、「アストラル体」など)を受け入れることができなければ、読者は先に進むことができず、その門前で締め出されてしまう。

第二類型は実践から出発して思想へと向かうベクトルである。シュタイナー教育独自の実践が検討される際、第二類型においては、「シュタイナー教育ではなぜそうした特異な実践を行うのか」という素朴な問いに対し、その回答を人智学そのものに求める(「エーテル体に働きかけるためにフォルメン線描を行う」などといった説明)。故に、その秘教的説明はシュタイナー思想に馴染めない者にとって、当然のことながら説得的なものとなりえない。結果、人智学による実践の説明は必然的に排他性を帯びることとなる。

誤解を招く恐れがあるので強調しておこう。シュタイナー自身は、人智学の盲目的受容を断固拒否した。

テキストの内容を無批判に受け入れることを彼は決して許さなかった。例えば著者『神秘学概論』、「初版まえがき」においてシュタイナーは次のように述べる。「著者はまた、論理的に妥当する事柄のみを、受け入れようとする、慎重な読者を求めている。盲目的な信仰だけで済ませようとする限り、本書には何の値打ちも見出せないであろう。とらわれぬ理性の前でみずからを正当化しうる限りにおいてのみ、本書は存在するに値する。盲目的な信仰は、愚かな迷信を真実と取り違えかねない⁷³⁾」。彼は、各々が人智学の思想的内容を自らの思考によって徹底的に吟味することを願ったのである。

だが、シュタイナー（教育）思想もしくはその教育実践について検討した文献（第一類型、第二類型）が、そうした理性的・批判的姿勢を保持しているかと言えば、その問いには否と応えざるを得ない。これは先行研究の不備というよりは、人智学の性質そのものに起因しているように思われる。繰り返し強調しておこう。人智学に接近する者には、まず第一に人智学への受容的態度が求められる（先に記した通り、この態度なくしてテキストを読み進めることができない）。そして第一、第二類型のテキストは、この受容的態度を暗黙の前提としている。

確かに原初においてシュタイナーその人は読者に人智学の理性的吟味を求めている。だが、人智学が解説者（第一、第二類型）を経由して語られる場合には、必然的帰結としてそこに人智学への受容的雰囲気が付与されてしまう。なぜなら解説者は既に人智学の洗礼を受けている（受容的態度を保持している）からこそ、解説者となりえているからである。人智学用語に拒否反応を示す者が、人智学用語を用いてそれを概説することなどできようはずもない。『人智学通 anthroposophische Sachkenner』は、師匠を『信仰 gläubiges』する弟子の立場にあるので、師の言葉を信じて疑うことがない⁷⁴⁾。かくして人智学への肯定的雰囲気（ときに讚美や絶対肯定）が第一、第二類型の文献に瀰漫することとなる。先に第一類型のうち、『自由の哲学』を論じたテキストは思想研究として最も堅実であると述べた。だが、最も手堅いはずの、この哲学的著作を検討した研究においてさえ、ときにシュタイナー賛美の傾向が見てとられる。例えば『自由の哲学』に関するスワシヤンの研究には、*A Celebration of Rudolf Steiner's book The Philosophy of Freedom*、すなわち、「ルドルフ・シュタイナー『自由の哲学』の賞賛」という副題が掲げられている。副題のうちに既に批判的態度の不在が宣言されているのである。こうした事態は、シュタイナー思想研究をめぐる現状を象徴的に示しているように思われる。

そして、人智学の絶対視へと陥りかねないこうした傾向の持つ危険性こそが、人智学の批判者たちにとって格好の標的となるのである。ローザクはこの点について次のように述べている。シュタイナーは、「弟子たちに、師の主題のバリエーションを試み、限りなき感謝を捧げる以外にほとんど何もすることを残してくれなかった。その結果、人智学運動はシュタイナーの死後、あらゆることに関する彼の権威のせいで沈滞し、固定してしまい、彼の膨大な著作の受け売り解釈学に満足するばかりとなってしまった⁷⁵⁾」。

第一、第二類型はしばしば以上のような帰結を生む。「人智学による人智学の説明」は閉じた循環を生ぜしめ、必然的に閉鎖系を完成させる（「わかる人にはわかる」という言い回しの閉鎖性・排他性）。

従って、第一、第二類型はいずれも、冒頭で述べた思想と実践の「乖離状況」に解決を与えない。というよりも、人智学内部においては、そもそも思想と実践は乖離していない。乖離していないどころか、両者はこの上なく緊密に連関するものと理解され、自己完結しているのである。

第一、第二類型はいずれも、「閉鎖」へのベクトルである。このベクトルは思想と実践の「乖離状況」を促進させることはあっても、決して解消には向かわない。これにより、閉鎖型の理解は「乖離状況」の慢性化に（無意識的にはあれ）加担することとなる。

第一、第二類型の研究が不必要だと言いたいのではない。それらの研究はシュタイナー（教育）思想の普及に紛れもなく貢献してきたし、これからもし続けるだろう。このことは疑いえない。その事実を大前提とした上で、現状において「開放のベクトル」が求められていると主張したいのである。

2-4. 第三、第四類型－開放型

2-4-1. 第三類型

では「開放のベクトル」とはいかなる研究を指すのか。シュタイナー教育をめぐる喫緊の課題は、それを支える（教育）思想を開いてゆくことにある。この課題に応えるのが第三類型及び第四類型（開放型）であ

る。

閉鎖型の研究との決定的差異は、開放型の研究が、人智学への受容的態度を前提としない点にある。故に、人智学に馴染みのないものにとってもアクセスが可能である。よって、「乖離状況」の橋渡しに寄与するものとなりうる。だが、第三、第四類型は、第一、第二類型に比し圧倒的に少数である。

第三類型は、「シュタイナー（教育）思想の比較研究もしくは思想史的研究」である。すなわち、他の思想との比較のもとでシュタイナー思想の特徴を描き出そうとする試み、あるいはシュタイナーを思想史的に位置付けようとする試みである。だがこうした研究は極めて少ない。深澤はこの点について次のように述べる。「人智学運動は、その思想面とは別に教育や障害者医療、農業実践などで広く社会的認知を受けているために、逆にその秘教的思想が検討されにくいという側面がある。……宗教史学的・思想史的研究やグノーシス主義との比較研究はほとんど皆無である⁷⁶⁾」。

比較研究として散見されるのが、ユングとシュタイナーの比較である。その代表的なものとしてヴェーアの『ユングとシュタイナー』が挙げられる。ここでヴェーアが試みているのは、両思想家を「対置 Konfrontation」し「共観 Synopse」することである。彼の目指す「対置」、「共観」とは次のような方法である。「対置とは、二人の人物の著作を、相互に対照させる必要があるという意味である。その場合、まず承認され、認識される必要があるのは、両者の認識方法の性質の相違である。この相違は、何等かの和合の試みによって取り繕われてはならないし、性急に類似点を対比することによって当り障りのないものにされてもならない。とはいえ、この相違を承認しても、共通の言語に類するものを見出したり、共通の公分母を探り出す作業は、それが成功するものなら、続けなければならない⁷⁷⁾」。また「共観」については、ケーベルレを援用しつつ次のように説明される。「共観とは……総合を意味するものではなく、種々の仮説や理論を加え合わせたものでもない。……共観とは、むしろこの言葉のギリシア語の意味通り、新しい認識や進歩に対して心を開いた状態で、一切の真正で本質的な要因を、まとめて観じる試みなのである⁷⁸⁾」。こうした方法に則り、安易に両者の共通項を抽出するのではなく、ヴェーアは慎重にユングとシュタイナーの比較を試みている。

またエレンベルガーもヴェーア同様、短いながら、ユングとシュタイナーの比較検討を行っている。両者の類似点については次のように記される。「二人とも超心理学的体験があり、二人とも無意識の心の深淵を探究する自己訓練法を考案した。そして二人とも、魂の旅から戻ってきた時は新しい人格の持主となっていた。二人とも人生は変容に次ぐ変容であるとしたのも不思議ではない⁷⁹⁾」。また相違点についてはそれぞれが「無意識への旅をどのように活用したか」にあると述べている。「どちらも人生の半ば近くに創造の病を……経験し、両者ともこの体験から教説の基本概念を抽出した。しかしシュタイナーが知識の霊的源泉に到達し、それによって自分は啓示を行う能力を身につけたといわんとするのに対して、ユング……は精神療法の実施が与えてくれる実践的作業から離れなかった⁸⁰⁾」。

さらに高橋（巖）は、ユングとシュタイナーが「錬金術」に対してそれぞれいかなる態度を示していたか、検討を行っている。そこにおいてユングは現代の錬金術を「心理学」と呼び、シュタイナーは現代の錬金術を「人智学」と呼んだと指摘されている⁸¹⁾。

西平⁸²⁾は、『魂のライフサイクル』においてシュタイナー思想をユングの深層心理学やウィルバーのトランスパーソナル理論との関連で検討している。そして、エリクソン理論を基盤としつつ、西平は発達研究と輪廻思想の接続を試みている。ここでは、シュタイナー独自のライフサイクル論がユング、ウィルバーとの対比の中で相対化されている。

さらに深澤は、「グノーシス」をめぐる論文集において、シュタイナー思想とグノーシス主義の関係を示し、例えば人間論に関して「肉体・魂・霊というグノーシス的人間三分法は、シュタイナーにとっても人間理解の基本をなしている」と指摘する⁸³⁾。そして、ここにおいて深澤は、人智学とグノーシスの通底及び差異を明らかにしている。

柴山⁸⁴⁾は自覚的にシュタイナー思想の思想史的研究を試みている。例えば、シュタイナーの色彩論をパウル・クレイ、カンディンスキーのそれと比較している。柴山はゲーテ色彩論を出発点とし、独自の色彩論を展開していった三者を比較することで、シュタイナーの色彩論の特徴を描き出した。また、別の論文ではシュタイナーが19世紀自然科学における科学主義といかに対峙し、反科学的な人間観を構築していったかを明

らかにしている⁸⁵⁾。さらに柴山はシュタイナーの教育実践についても思想史的観点から分析を試みている。すなわち、シュタイナー教育における「オイリュトミー」を彼の同時代人であるエミール・ジャック＝ダルクローズが展開したミュース的实践、「リトミック」を参照枠として考察した⁸⁶⁾。

これら第三類型の研究はいずれも他の思想との比較を通じて、シュタイナー思想を相対化する試みといえる⁸⁷⁾。人智学の相対化は、その特異さを緩和し、他の思想との比較の中で、人智学の特徴を浮き彫りにさせる。こうした相対化の視点により、第一類型の孕む絶対化は緩和される⁸⁸⁾。

だが、ヴェーアがあくまで「対置」と「共観」を方法論とし、思想と思想の安易な統合を避けたように、第三類型の研究は、禁欲的に「相対化」の地平に留まっているように思われる。第三類型は相対化の過程で人智学の特徴を浮かび上がらせるものであり、こうした研究は、人智学を外部から分析する試みとなっている。

2-4-2. 第四類型

第四類型は、「シュタイナー（教育）思想を他の理論を援用して読み解く試み」である。これは「人智学」の特殊用語を用いずにシュタイナー教育（思想）を読み解こうとする試みと言い換えられる。

この種の研究として、今井、西平の研究が挙げられる。今井はルーマンのシステム理論をもとにシュタイナー教育の分析を行っている⁸⁹⁾。とりわけ、シュタイナー学校で採用されている8年間一貫教育は、オートポイエーシスシステムとしての生徒に対して、「因果地図」を精密にするシステムとして読み解かれている。

また西平は「型」の観点からシュタイナー教育独自の実践である「フォルメン線描」の分析を行っている⁹⁰⁾。そこでは文化人類学の分析枠組み「イーミックとエティック」に基づき、「エティックな（人智学の専門用語を使わない・外部の観察者の）視点から見る時、フォルメンは、どのように理解されるのか」という問いが立てられ、「型に入る」という視点からフォルメンの読み解きが行われている。

シュタイナーの（教育）思想を特異で閉鎖的な思想空間から解き放ち、シュタイナー教育の根底に働くメカニズムを原理的次元で解明することがこれらの研究において目指されているのである。

第四類型はシュタイナー（教育）思想を読み解く上で画期的であり、人智学を教育学研究における最新の成果と交差させ、その現代的意義を問うという意味において極めて重要である。だが、こうした研究は残念ながら現状において十分な研究蓄積を持たない。

また、この種の研究は、それが安易に遂行されるならば、外部から既成の枠組みを投影して事足りりとするにもなりかねない。慎重な態度が求められるのである。

さて、こうした第三、第四類型に見られる開放型の姿勢は、実のところ、シュタイナー自身の思想的態度と極めて親和的である。開放のベクトルは、思想家としてのシュタイナーの任務と正確に重なるのである。次節ではこの点を吟味することにした。

3. 開放型の思想家シュタイナー

シュタイナー思想は「オカルト occult」だとしばしば批判される。例えば、バーデヴィーンは、シュタイナー教育への批判的文脈において、この教育を次のように断罪する。「ヴァルドルフ学校の子供たちは、親にも、またもちろん公けの監督官庁にも、全く説明されない、このような判断基準、つまりオカルト的認識にもとづいて烙印を押され、規制を受けているのです（傍点筆者）⁹¹⁾」。批判者たちがシュタイナー思想を「オカルト」的だと形容する際には、そこには常に「いかがわしさ」、「おどろおどろしさ」、「非科学的」といった漠然とした負のイメージが漂っている。

だが、この語（「オカルト occult」）は果たしてシュタイナー思想を形容する語として適切であろうか。

強調しておきたいのは、誰よりシュタイナー自身が、同時代の人間に人智学的思想内容は容易に受け入れられないであろうことを自覚していたという点である。彼は主著『神秘学概論』の「初版まえがき」で次のように述べる。「この本を数ページ読んだ人は、その気質次第で、微笑をうかべたり、憤激したりしながら、その本を横に置き、次のように言うであろう。『一体、どんなバカが今の時代にこんな支離滅裂な思いつきを書く気になったのか。こんな本は、世の中に生まわっている他のガラクタと一緒に、棄ててしまえばよい⁹²⁾』」。

ここにおいて、彼は出発点として人智学に対して否定的・懐疑的な読者を排除していない。シュタイナーが求めていたのは、「ここ『神秘学概論』註：筆者」で述べられている事柄を、盲目的な信仰を持って受け入れようなどとは思わない読者であり、本書の内容をみずからの魂の経験と認識に即して吟味しようと努める読者である⁹³⁾。そして、このテキストは「合理的な思考だけでも十分にその内容を吟味することができし、合理的な思考によって吟味されることを期待してもいる⁹⁴⁾」と断言する。

「合理的思考」による吟味。これは人智学の盲目的受容とはおよそ正反対の態度である。人智学に最も批判的な者でさえも、「合理的思考」に基づき、偏見なくこれに対峙するならば、その思想内容が理解可能となるという確信、そして「合理的思考」でもってその内容を徹底的に吟味してほしいと願う、彼のそうした態度のうちには、閉鎖的・排他的姿勢（「わかる人にだけわかればよい」）は微塵もみられない。そうした彼の姿勢に鑑みるならば、人智学を（漠然とした負のイメージを纏った）「オカルト」として一蹴することは（人智学の盲目的受容と同じく）不当ではあるまいか。

この問題を考えるうえで、ひとまず「オカルト」の語源に立ち返って考えてみよう。周知の通り、「オカルト occult」は、ラテン語 occultare の過去分詞 occultus を語源とし、oc-（……の上に）と cult（隠す）で構成された形容詞であり、「上を覆い隠して見えなくすること」を意味した。つまり、「オカルト」は「隠された」、「秘められた」、「秘密の」といった様態を示すものであり、語源的にはそこに負のニュアンス・負の価値判断を含まないのである。

従って、「オカルト」を語源に即して意味付けるならば、それは「隠された・秘密の思想」ということになる。さらに、ここで「隠された」という場合、何に対して隠されたのかといえば、それは正統キリスト教会に対してである。正統キリスト教会の一元的支配下において、異端の烙印を押された思想、それこそが「オカルト（隠された思想）」である。

異端の烙印を押された思想。ここで、シュタイナー思想とも密接な関連を有するグノーシスが思い起こされる⁹⁵⁾。「その思想傾向から見ても、また教会的キリスト教との関係からしても、シュタイナーの人智学がしばしば『グノーシス（主義）』の一形態と見なされがちなることは容易に理解できる⁹⁶⁾」。グノーシスは常に「ヨーロッパの陰の精神史⁹⁷⁾」を形づくってきた。正統キリスト教信仰の体系としてのスコラ学が成立したのとはほぼ時を同じくして、ボゴミール派や、そのヨーロッパ版であるカタリ派など、グノーシスの傾向を持つ教派が異端として弾劾された。正統と異端の対立の中で、グノーシス主義が、常に「異端」の側にあったことは明白である⁹⁸⁾。そして、「グノーシス的共同体は教会や国家の周辺に位置しており、どちらにも迫害されて、ほとんど絶滅寸前にまで追い込まれた⁹⁹⁾」。

故に「オカルト（隠された思想）」とは、「好事家たちの悪趣味でもなければ、非科学的絵空事でもなく、ましてや安手のエンタテイメントでもない。それは、隠さなければ、すなわちオカルティックでなければ、生き残ることなどできょうはずもなかった教えの法統なのである¹⁰⁰⁾」。そしてかろうじて地下水脈のうちに保持されたものが、オカルティズムとして近代に芽吹いた¹⁰¹⁾。

さて、ここでわざわざ「オカルト」の語法にこだわった訳は、その語義の無知が、シュタイナーの思想的任務の誤解を招くこととなるからである。「オカルト」の内実を見誤ると、彼が生涯をかけて目指した、その思想的使命自体を決定的に取り違えることとなる。

シュタイナーが目指したのは、隠された秘教的叡智の顕在化である。秘められた叡智を一部の特殊な共同体のうちに秘匿しておく（ヴェールで覆う）のではなく、その叡智を広く周知させること、これが彼の思想的任務であった。「ヴェールを取ること」こそが彼の使命だったのである。この点について小杉は的確に次のように述べている。「彼〔シュタイナー 註：筆者〕は隠されたものの公開者として、西洋の歴史の中に立っている。その意味で彼は、オカルティズムに終焉をもたらそうとした人物であり、その意味でなら、まさに反オカルティストと呼ぶことができよう¹⁰²⁾」。

「隠された・秘められた叡智」を隠されたまま・秘められたままに留めておくという道を、シュタイナーは選択しなかった。彼は西洋精神史のうちに脈々と受け継がれてきた秘教的智慧を閉ざされた集団の中でのみ流通させようとしたのではない。その逆である。シュタイナーは「『隠さない・隠されてきたことを公開する・論理と思考によって理解できるように解き明かす』立場である¹⁰³⁾」。

秘められた叡智をただ単に開示しようとしただけではない。シュタイナーは、時代の要請に沿う形で、厳

密なる学として人智学を打ち立てようとした。「シュタイナーは人智学を、通常の学問の継続として考えているのであって、それと矛盾するものとは決して考えていないのである¹⁰⁴⁾」。すなわち、『自然科学的現実事象研究 die Naturwissenschaftlichen Tatsachenforschung』と精神科学 (Geisteswissenschaft) の諸成果との間にシュタイナーは矛盾対立を見ておらず、この二種類の学問が相互に補い合い一つになった時に初めて、それは人間が持つべき真の学問となるのだと考えていた¹⁰⁵⁾。

このことはシュタイナーが人智学を自然科学的基盤の上に構築し、その思想を徹頭徹尾、科学的厳密さをもって成立せしめようとした態度のうちに現われている。深澤が指摘している通り、「シュタイナーの『科学性 (学問性)』主張を看過すると、シュタイナーの真意は分からない。宗教的全体知や、終局的救済といったことがらを語ることを、シュタイナー自身は回避している¹⁰⁶⁾」。ただしここで示されているところの科学とは無論、「一般への性急な普及が可能なものではなかった¹⁰⁷⁾」のではあるが。

4. おわりに

初期シュタイナーは堅実な思想研究を数多く遺し、思想研究者としての訓練を十分に受けていた。ローザクが指摘している通り、「ほとんど40歳になるまで、シュタイナーは常套的ではあれ教養ある学者で、形式哲学を研究し、ゲーテ＝シラー書類館の学者兼保管人で、一流のドイツ文学雑誌を編集し、ウィーン、ワイマール、ベルリンの芸術世界、知的世界を強力に結びつけていた¹⁰⁸⁾」。シュタイナーは、あくまで自然科学 (ゲーテ的自然科学) 的方法の基礎の上に認識論を構築しようとしたのであり、多くの神秘思想が陥っているような安易に霊媒や降霊術などに走る態度を危険視した。「シュタイナーは、いわゆる宗教的高揚や、浄福や、エクスタシーや、悟りのような瞬間的覚知といったことは、ほとんど語らない¹⁰⁹⁾」。そして、ヴェーアも指摘する通り、「シュタイナーの思惟に対する高い評価や、……自然科学的確實性を満たすための努力は、……探究方法が主観的な悪しき神秘主義に陥ることを防いでいる¹¹⁰⁾」。彼と袂を分かつこととなった神智学は、「靈的知識にたいする科学的な研究方法には関心がなく、それを疑いの眼で見ていた¹¹¹⁾」のであり、こうした態度はシュタイナーの姿勢と真っ向から対立するのであった¹¹²⁾。

従って、シュタイナー自身が人智学を「閉鎖型」の思想として打ち立てたのではないことがこうした姿勢からも窺える。時代を診断し、時代の要請に合う形で秘教的叡智を現代に甦らせること、自然科学的厳密さを伴った形で人智学を樹立すること、このことがシュタイナーの思想的使命だったのである。

筆者は以上のようにシュタイナーを診断することで、彼が秘教的思想家 (オカルティスト) でなかったと言いたいわけではない。人智学が多分に秘教的内容を含み持つものであることは疑いえない。靈的指導者時代の彼のテキストを紐解いてみれば、このことは誰の目にも明らかである。

本論考が浮き彫りにしたかったのは、シュタイナーが徹底して自身の思想を、「開放型」として構想したというその一貫した姿勢である。彼のそうした姿勢を無視することで、人智学を (負の価値判断を賦与された) 「オカルト」として一蹴し、彼の思想的努力に目を向けなければ、人智学は我々にとっていつまでも疎遠であり続けるだろう。目下、シュタイナー研究において求められるのは、彼の開放的側面を救い出す (先行研究の第三類型、第四類型のような)、地道な作業ではあるまいか。そしてそうした試みは、シュタイナー自身の思想的任務とも合致しているのである。

◆註

- 1) Freunde der Erziehungskunst Rudolf Steiners e.V. (Hrsg.) 2001: *Waldorf Pädagogik Weltweit*, Berlin
- 2) シュタイナー学校の卒業生調査については、例えば今井の論文参照。[今井重孝 2010: 「三つのシュタイナー学校卒業生調査の主要結果について」、『教育人間科学部紀要』第1号、青山学院大学]
- 3) 西平直 1999: 『シュタイナー入門』、講談社、12頁
- 4) 同上、12-13頁
- 5) Wilson, C. 2005: *Rudolf Steiner: the man and his vision*, Aeon, London, p. 9 = 1994: 中村保男・中村正明訳『ルドルフ・シュタイナー』、河出書房新社、9頁
- 6) *Ibid.* = 同上
- 7) Lindenberg, C. 1997: *Rudolf Steiner. Eine Biographie Bd. 1 & Bd. 2*, Freies Geistesleben, Stuttgart
- 8) Carlgren, F. 1975: *Rudolf Steiner und die Anthroposophie*, Philosophisch-Anthroposophischer Verlag, Dornach = 1992: 高橋明男訳『ルドルフ・シュタイナーと人智学』、水声社
- 9) Hemleben, J. 1975: *Rudolf Steiner A Documentary Biography*, trans. Twyman, L., Henry Goulden, Sussex
- 10) Bock, E. 2008: *The Life and Times of Rudolf Steiner Vol. 1. People and Places*, Floris Books, Edinburgh & Bock, E. 2009: *The Life and Times of Rudolf Steiner Vol. 2. Origin and Growth of his Insights*, Floris Books, Edinburgh
- 11) Easton, S.C. 1980: *Rudolf Steiner: Herald of a New Epoch*, Anthroposophic Press, New York
- 12) Shepherd, A.P. 1983: *Rudolf Steiner Scientist of the Invisible*, Floris Books, Edinburgh = 1998: 中村正明訳『シュタイナーの思想と生涯』、青土社
- 13) Emmichoven, F.W. 1961: *Rudolf Steiner*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart
- 14) Edmunds, F. 1990: *From Thinking to Living: The Work of Rudolf Steiner*, Element Books, Dorset
- 15) Lachman, G. 2007: *Rudolf Steiner: An Introduction to His Life and Work*, Penguin Books, London
- 16) Seddon, R. 2005: *Philosophy as an Approach to the Spirit: An Introduction to the Fundamental Works of Rudolf Steiner*, Temple Lodge, East Sussex
- 17) 吉田武男 2008: 『シュタイナーの人間形成論——道徳教育の転換を求めて』、学文社
- 18) Kugler, W. 1987: 久松重光訳『シュタイナー 危機の時代を生きる——学問・芸術と社会問題』、晩成書房
- 19) Wilkinson, R. 2001: *Rudolf Steiner: An Introduction to his Spiritual World-view, Anthroposophy*, Temple Lodge, East Sussex
- 20) Martin, M. 1998: *Anthroposophie was ist das? Einführung in die Geisteswissenschaft Rudolf Steiners*, Oratio Verlag, Postfach
- 21) McDermott, R.A. (Edited and introduced) 2007: *The Essential Steiner*, Lindisfarne, Great Barrington
- 22) Seddon, R. 1984: *Rudolf Steiner*, North Atlantic Books, California
- 23) Welburn, A. 2004: *Rudolf Steiner's Philosophy and the crisis of contemporary thought*, Floris books, Edinburgh
- 24) 高橋巖 1980: 『神秘学講義』、角川書店、他多数
- 25) 西川隆範 1987: 『シュタイナー思想入門』、水声社 西川隆範 1995: 『あなたは7年ごとに生まれ変わる』、河出書房新社、他多数
- 26) 広瀬俊雄 1988: 『シュタイナーの人間観と教育方法 幼児期から青年期まで』、ミネルヴァ書房
- 27) Witzmann 1988: *Die Philosophie der Freiheit als Grundlage künstlerischen Schaffens*, Gideon Spicker Verlag, Dornach
- 28) Dietz, K.M. (Hrsg.) 1994: *Rudolf Steiners <Philosophie der Freiheit> Eine Menschenkunde des höheren Selbst*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart
- 29) Selg, P. 2007: *Rudolf Steiners innere Situation zur Zeit der «Philosophie der Freiheit»*, Verlag am Goetheanum, Dornach
- 30) Palmer, O. 1975: *Rudolf Steiners on his Book The Philosophy of Freedom*, Anthroposophic Press, United States
- 31) Swassjan, K. 1996: *The Ultimate Communion of Mankind: A Celebration of Rudolf Steiner's book The Philosophy of Freedom*, Temple Lodge, London
- 32) Wehr, G 1977: *Der padagogische Impuls Rudolf Steiners*, Kindler Verlag, München
- 33) Querido, R.M. 1982: *Creativity in Education: The Waldorff Approach*, International book
- 34) 本書ではイギリスにおけるシュタイナー教育の実践について詳細な解説がなされている。第1学年から第12学年までのカリキュラムが網羅的に紹介され、同時にそうしたカリキュラムを支える理論についても配視されている。[Childs, G. 1991: *Steiner Education in Theory and Practice*, Floris Book, Edinburgh]

- 35) Harwood, A.C. 1967: *The Way of a Child: An Introduction to the Work of Rudolf Steiner for Children*, Rudolf Steiner Press, London
- 36) Wilkinson, R. 1993: *Rudolf Steiner on Education: A Compendium*, Hawthorn press, Gloucestershire
- 37) Carligen, F. 1977: *Erziehung zur Freiheit*, Freies Geistesleben, Stuttgart
- 38) Clouder, C. & Rawson, M. 1998: *Waldorf Education*, Floris Book, Edinburgh
- 39) Rist, G & Schneider P. 1979: *Integrating vocational and general education: a Rudolf Steiner School: case study of the Hibernia School, Herne, Federal Republic of Germany*, Unesco Institute for Education, Hamburg
- 40) Freien Pädagogischen Vereinigung Bern (Hrsg.) 1976: *Waldorfpädagogik in öffentlichen Schulen Versuche und Erfahrungen mit der Pädagogik Rudolf Steiners*, Verlag Herder, Freiburg
- 41) 高橋巖 1984: 『シュタイナー教育入門—現代日本の教育への提言』、角川書店 高橋巖 1987: 『シュタイナー教育の方法』、角川書店。高橋巖 2009: 『シュタイナー 生命の教育』、角川学芸出版ほか多数
- 42) Heydebrand, C. 1992: 西川隆範訳『子どもの体と心の成長』、イザラ書房
- 43) 本書は、キャンプヒル・ムーブメントの発展に寄与した著者による幼児教育のテキストである。キャンプヒル共同体 (Camphill Community 1940年、スコットランドに設立) は人智学の理念に基づき、健常者と障害者の共同生活を営むものであり、現在この活動は世界約20カ国に広がっている。[König, K. 1958:, Vandenhoeck & Ruprecht Verlagsbuchhandlung, Göttingen]
- 44) Grunelius, E.M. 1987: 高橋巖・高橋弘子訳『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』、ルドルフ・シュタイナー研究所
- 45) 本書では、シュタイナーの幼児教育におけるファンタジーに満ち溢れた様々な遊びを紹介している。[Kutik, C. 1990: *Mit kleinen Kinderen spielen, erleben, schöpferisch sein zu Hause und in Spielgruppen*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart]
- 46) Raichle, B. 2009: 入間カイ訳『乳幼児のためのシュタイナー保育』、水声社
- 47) 堀内節子 2000: 『0歳から7歳までのシュタイナー教育』、学習研究社
- 48) Schneider, J.W. 1993: 高橋明男訳『メルヘンの世界観』、水声社
- 49) König, S. 1999: 高橋弘子訳『幼児のためのメルヘン』、水声社
- 50) Jafke, F. 1973: *Spielzeug von Eltern Selbstgemacht*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart
- 51) Neuschutz, K. 1999: 寺田隆生訳『おもちゃが育てる空想の翼 シュタイナーの幼児教育』、学陽書房
- 52) 吉良創 2001: 『シュタイナー教育 おもちゃと遊び』、学習研究社
- 53) Koepke, H. 1999: 森章吾訳『9歳児を考える』、水声社。及び、Koepke, H. 2003: 合原弘子訳『反抗期のシュタイナー教育—自立へと向かう遙かな旅』、学陽書房
- 54) スティラーは、シュタイナーの教育論を模範として、気質論などの観点から、思春期(10代)の子どもが直面する問題について考察を試みている。[Staley, B.K. 1988: *Between Form and Freedom: A Practical Guide to the Teenage Years*, Hawthon Press]
- 55) Eller, H. 2005: 鳥山雅代訳『4つの気質と個性のしくみ シュタイナーの人間観』、トランスビュー
- 56) Kutzli, R. 1987: *Entfaltung Schöpferischer Kräfte durch lebendiges Formenzeichnen I & II*, Novalis Verlag, Schaffhausen
- 57) Niederhäuser, H.R. 1971: *Formenzeichnen: ein pädagogisch künstlerischer Impuls Rudolf Steiners*, Zbinden Verlag, Basel
- 58) Kranich, J.M., Jünemann, H.B., Buhler, E., Schubert, E. 1992: *Formenzeichnen*, Freies Geistesleben, Stuttgart
- 59) 高橋巖監修 1986: 『オイリュトミー 新しい人間創造のための言語音楽芸術』、泰流社
- 60) 高橋弘子編 1998: 『オイリュトミーの世界』、水声社
- 61) 秦理恵子 2001: 『シュタイナー教育とオイリュトミー』、学陽書房
- 62) Koch, J. & Wagner, G. 1990: *Die Individualität der Farbe*, Stuttgart
- 63) 本書では、シュタイナー学校における芸術教育(とりわけ絵画教育)に関して、12年生までの各学年ごとの課題ならびにその内容が詳細に分析されている。また、その絵画教育を支えるシュタイナーの色彩論についても言及がある。[Jünemann, M & Weitmann, F. 1976: *Der Künstlerische Unterricht in der Waldorfschule Malen und Zeichnen*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart]
- 64) Strauss, M. 1998: 高橋明男訳『子どもの絵ことば』、水声社
- 65) Muche, F. 2002: 泉本信子・中山やちよ訳『シュタイナー学校の音楽の授業』、音楽之友社
- 66) ドイツのシュタイナー学校連盟によって発行されている「人間理解と教育」シリーズのうちの一冊にあたる本書では、シュタイナー学校の音楽の授業について、各学年ごとの音楽的課題が詳細に検討されている。[Wünsch, W. 1995: *Menschenbildung durch Musik*, Freies Geistesleben, Stuttgart]

- 67) Ulin, B. 1987: *Der Lösung auf der Spur. Ziele und Methoden des Mathematikunterrichts Erfahrungen aus der Waldorf Pädagogik*, Freies Geistesleben, Stuttgart
- 68) 本書ではシュタイナー学校における算数のエポックの内実について紹介がなされている。とりわけ「気質に応じた計算」をめぐる箇所にはシュタイナー学校特有の考え方が示されている。[Schubert, E. 1993: *Der Anfangsunterricht in der Mathematik an Waldorfschulen*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart]
- 69) 高橋巖 1989:『シュタイナーの治療教育』、角川書店
- 70) Weihs, T.J. 1993: 高橋明男訳『魂の保護を求める子どもたち』、水声社
- 71) 河津雄介 1987:『シュタイナー学校の教師教育——シュタイナー教育教員養成セミナー体験記』、創林社
- 72) Wehr, G. 1972: *C.G. Jung und Rudolf Steiner: Konfrontation und Synopse*, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, SS. 13-14 = 1982: 石井良・深澤英隆訳『ユングとシュタイナー——対置と共観』、人智学出版社、18-19 頁
- 73) Steiner, R. 2005: *Die Geheimwissenschaft im Umriss*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S. 13 = 1998: 高橋巖訳『神秘学概論』、筑摩書房、16 頁
- 74) Wehr 1972, S. 14 = 1982、19 頁
- 75) Roszak, T. 1976: *Unfinished animal: the aquarian frontier and the evolution of consciousness*, Faber, London, p. 149 = 1995: 志村正雄『意識の進化と神秘主義』、紀伊国屋書店、196 頁
- 76) 深澤英隆 2001:「ルドルフ・シュタイナーとグノーシス主義」、大貫隆・島園進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス 異端と近代』、岩波書店
- 77) Wehr 1972, S. 19 = 1982、27 頁
- 78) *Ibid.*, S. 20 = 同上、28-29 頁
- 79) Ellenberger, H.F. 1970: *The Discovery of the Unconscious: the History and Evolution of Dynamic Psychiatry*, Basic Books, New York, p. 686 = 1980: 木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見(下)——力動精神医学発達史』、弘文堂、320 頁
- 80) *Ibid.*, pp. 686-687 = 同上、320-321 頁
- 81) 高橋巖 1989:『現代の神秘学』、角川書店、182-211 頁。また、この他にも高橋は、雑誌『リーリエ』において、ユングとシュタイナーの比較を行っている。[高橋巖 1984-85:「ユングとシュタイナー」、『リーリエ』、第5、6、7号、リーリエ]
- 82) 西平直 1997:『魂のライフサイクル ユング・ウィルバー・シュタイナー』、東京大学出版会
- 83) 深澤 2001、313 頁
- 84) 柴山英樹 2005:「シュタイナーの色彩論に関する思想史的考察」、『近代教育フォーラム』第14号、教育思想史学会
- 85) 柴山英樹 2008:「シュタイナーの人間観に関する考察——19世紀自然科学との対峙という視覚から——」、臨床教育人間学会編『臨床教育人間学3 生きること』、東信堂
- 86) 柴山英樹 2005:「ルドルフ・シュタイナーにおける『身体』・『リズム』・『教育』の関係めぐって——エミール・ジャック＝ダルクローズとの比較考察を通じて——」、『教育哲学研究』第91号、教育哲学会
- 87) ここで挙げたものの他にも、ペスタロッチとシュタイナーの教育思想を比較した長尾の研究 [長尾十三二 1982:「ペスタロッチとシュタイナー——素描的詩論——」、『人智学研究』第三号、人智学出版社、ペスタロッチ及びブーバーの教育思想とシュタイナーのそれを並べて吟味したダンナーらの研究 [Danner, H., Müller, O., Müller-Wieland, M., Wehr, G 1985: *Zum Menschen erziehen: Pestalozzi, Steiner, Buber*, Verlag Moritz Diesterweg, Frankfurt am Main]、フレーベルとシュタイナーの社会変革思想を比較した酒井の研究 [酒井玲子 2003:「社会問題の革新と人間教育の役割: F. フレーベル, R. シュタイナーの教育論から」、『北星学園大学文学部北星論集』第40号、北星学園大学文学部]、シュタイナーの幼児教育思想と倉橋惣三のそれを比較した今井の研究 [今井重孝 1996:「ルドルフ・シュタイナーと倉橋惣三: 両者の幼児教育思想の類似性と類似性を生み出した原因について」、『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』第18巻第2号、東京工芸大学工学部] などがある。
- 88) 筆者は、第18回教育思想史学会コロキウムにおいて、「シュタイナー教育を思想史的に研究すること」と題し、共同研究発表を行ったが、そこでの課題もまた、シュタイナーを思想史的に位置付けて考察し、それを一般化してゆく試みであった。その内容については、以下の論考を参照。[吉田教彦・井藤元・水田真由・河野桃子・藤瀬好子 2009:「シュタイナー教育を思想史的に研究するということ」、『近代教育フォーラム』第18号、教育思想史学会]
- 89) 今井重孝 1998:「シュタイナー認識論の現代的射程」、『ホリスティック教育研究』第1号、日本ホリスティック教育協会
- 90) 西平直 2003:「シュタイナー教育のアート——『フォルメンが想像力を育む』とはどういうことか」、佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む』、東京大学出版会
- 91) Badewien, J. 1990: 笠利和彦訳『シュタイナー教育——その実体と背景——』、グロリア出版、50 頁

- 92) Steiner 2005, S. 7 = 1998, 9-10 頁
- 93) *Ibid.*, S. 13 = 同上, 16 頁
- 94) *Ibid.*, S. 12 = 同上, 15 頁
- 95) 一概に「グノーシス」といってもその概念規定は極めて困難である。1966年、イタリアのメッシーナでグノーシス主義研究の学会が開催され、会議に次のような概念規定が行われた。『「グノーシス主義」は、(1)超宇宙的な神学的領域を可視的物質的宇宙と存在論的に対立させる反宇宙的二元論、(2)超宇宙的な神的本質と人間に内在する本来的自己の間の同質性、および、(3)この同質性の覚知をもたらす啓示、の三つを本質的な構成要素とする。『グノーシス』という概念は救済の不可欠条件としてのこの覚知を特定の指して用いられる。かつ、この提案に言う『グノーシス主義』と『グノーシス』はいずれも価値判断を含まない純粋に記述用の概念であって、時間的・空間的にも、後2-3世紀の地中海世界東部から中近東に集中的に出現したグノーシス主義にだけ限定されるものではなく、原理的には、一定の条件さえ整えば、それ以前にも以後にも、他のどのような地域においても、生成し得るものと定義された。だが、このメッシーナ提案後も、グノーシスの概念規定についての議論は続き、この提案の妥当性に対する批判も絶えないのだという。[大貫隆 2001:「原グノーシスとグノーシス的なもの」、大貫隆・島蘭進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス 陰の精神史』、岩波書店]
- 96) 深澤 2001, 317 頁
- 97) 村上陽一郎 2001:「グノーシスと陰の精神史」、大貫隆・島蘭進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス 陰の精神史』、岩波書店、241 頁
- 98) 同上, 242-243 頁
- 99) Scopello, M. 1997: 入江良平・中野千恵美訳『グノーシスとはなにか』、せりか書房、16 頁
- 100) 小杉英了 2000:『シュタイナー入門』、筑摩書房、73-74 頁
- 101) 同上, 75 頁
- 102) 同上, 86 頁
- 103) 西平 2003, 110 頁
- 104) 浅田豊 1978:「ルドルフ・シュタイナーにおける美学のあり方と芸術の使命」、『ルドルフ・シュタイナー研究』創刊号、ルドルフ・シュタイナー研究発行所
- 105) Becker, K.E. & Schreiner, H.P. (hrsg.) 1985: *Anthroposophie heute*, Fischer-Taschenbuch-Verlag, Frankfurt am Main, S. 7 = 1982: 新田義之・新田貴代訳『人智学の現況 — シュタイナー教育から《緑の党》まで』、人智学出版社、8 頁
- 106) 深澤 2001, 318 頁
- 107) Wehr 1972, S. 96 = 1982, 163 頁
- 108) Roszak 1976, pp. 125-126 = 1995, 166 頁
- 109) 深澤 2001, 313 頁
- 110) Wehr 1972, S. 224 = 1982, 381 頁
- 111) Shepherd 1983, p. 69 = 1998, 青土社, 91 頁
- 112) シュタイナー思想と他の神秘主義思想の相違について、シェパードは次のように述べている。「霊的な実在にたいして関心をもっているという点では両者は同じだったが、研究方法という点では、神秘家たちはシュタイナーとは正反対の立場をとっていた。ほとんどの神秘家は思考を霊に対立するものと見なし、霊的体験への道ではないと考えていた。そのかわりに感情という道を探り、内的な体験の中だけに霊的実在を求めた。シュタイナーは明晰な思考によって矯正されなければ、内的な体験は主観的ないしは病的になりやすいことを知っていた」。[*Ibid.*, p. 47 = 同上, 61 頁]